

モンゴルの教育における伝統的価値観と ソビエト社会主義価値観の葛藤

生涯教育専攻博士後期課程 バーサンジャブ・バトゲレル

序章

1924年にモンゴル人民共和国が誕生した。それは、ソビエト社会主義連邦共和国に続く世界で2番目の社会主義国家であった。それ以来最高の目標である共産主義社会の建設に向けて、徹底した社会主義路線がとられた。しかしながら1990年に初めて複数政党制を採用した選挙が行われると共に1992年にモンゴル国憲法を定め、その国名も「モンゴル国」とした。70年間に及び社会主義体制を築いてきた。社会主義計画経済を1991年から3年間で市場経済に改めるという方針が示された。こうした状況の中で、教育分野においても教育改革が相次いで行われる。その最大のもはモンゴルにおける学校教育制度が始まって以来続いてきた10年間の教育年限の延長である。2005年度より11年への延長、そして2008年度より12年への延長が始まっている。現在モンゴルではグローバル化や経済の安定化から、外国への留学を望む者が急増しているため、11年という教育年限では高等学校卒業後、そのまま続けて留学することが不可能であることから世界水準に見合った教育が必要という認識がなされたことが一因であった。しかし現場での受け入れに状況は変化していないため問題は学校の規模拡大と教師の増員などが継続的に行われている。

本論文の目的は、モンゴルの教育伝統的価値観とソビエト社会主義価値観の葛藤に至る教育的な歴史について、モンゴル建国時代の家庭教

育から社会主義体制崩壊の教育改革の変遷の課題を現場の教育の混乱等の実態に考察することである。そのため、モンゴルの教育伝統的価値観とソビエト社会主義価値観の葛藤についての研究課題として、第一章ではモンゴルにおける伝統的教育と改革運動には、家庭教育・モンゴル人教育の歴史概説を述べる。民族の文化や教育についてモンゴル人は、いつ頃から文字を持ったかという興味深い問題が存在する。遊牧民文化をもつモンゴルでは、古代から伝統的に広くゆきわたっていた家庭教育、宗教教育がどのような目的をもって教育されていたのか、を検討したい。1910年当時「人口はわずか60万人弱で、国民の3%しか読み書きができない状況にあった」⁽¹⁾。清朝から独立を宣言した(1911-1921年)民族復興運動は、どのようにしてこのような認識に至ったのかについて論述する。

第一章 モンゴルにおける家庭教育

第一節 モンゴルの歴史

モンゴル国の歴史は歴史的に6つに分けられ、

1. 1206年から1368年まで「世界でモンゴル帝国期」というジンギスハーンがモンゴル高原を統一し民族を形成し始めから元朝が崩壊するまで。
2. 1368年から1691年まで「モンゴル高原での独立時代」(オイラトモンゴル、東西モンゴル)対立の時代

3. 1691年から1911年まで「清朝支配下の時代」
4. 1911年から1921年までモンゴル革命の起こった「ボグドハーン」制モンゴル時代
5. 1921年から1992年までを社会主義時代
6. 1992年以降の民主主義国としてのモンゴル国資本主義時代

となる⁽²⁾。こうした長い歴史の中で、1206年にモンゴル帝国を建国したジンギスハーンは、1162年に生まれ「テムジン」と名づけられた。彼は、1189年に諸部族を統一し、モンゴル帝国の版図(支配地域)はアジア・ヨーロッパにまたがる広大な地域に及び、大モンゴル帝国の礎となった。1220年には「ハラホルム」をモンゴル帝国の首都として定めた。その7年後、建国の英雄「ジンギスハーン」は、1227年秋、波乱に満ちた生涯を閉じた。その後、この一大帝国はさまざまな対立により分裂を始め、万里の長城の北方地域へと撤退を余儀なくされている。元王朝の崩壊後、北元を建国したが領土は東モンゴルと西のオイラトモンゴルに分裂した。1500年前後、東モンゴルの支配者ダヤンハーンの軍はオイラトを撃退し、モンゴルは再統一を果たした。

17世紀になると、満州族がモンゴル東部で蜂起し、中国に清王朝を樹立し、1636年南モンゴルを従属させ、約半世紀後には北のハラハモンゴルを支配下に置いた。ところがラマ教に理解を示していた新王朝のチベット・モンゴル仏教優遇政策により、モンゴルにおけるチベット仏教が隆盛になった。20世紀を迎え、1911年、「清」で辛亥革命が起こり満州帝国が崩壊、外モンゴルが独立を宣言しチベット人であるジャイブツンダンバ・ホトクト第8世を皇帝としてボグドハーン(聖皇帝)政権が樹立された。しかし、独立は長く続かなかった。1912年中国では「清」国が倒れ、「中華民国」が成立、1915年にはその中華民国とロシア、モンゴルの三国でキャプタ協定が締結され、モンゴルの独立は取り消さ

れた⁽³⁾。この協定は中華民国を盟主とする「宗主権」下で(外)ハラハモンゴルに限定した自治が認められ、権益はロシアが握るというものであった。このような背景があり2大国の圧力による干渉をはねのける力は、独立したばかりのボグドハーン政権にはなかった。さらに1917年のロシア革命に始まる三年間は「激動の時代」の始まりであった。1919年ロシアの混乱に乗じて中華民国がダー・フレー(現在ウランバートル)に兵を進め、ハラハモンゴルの自治権を撤廃、その後ロシアの内戦で敗れた白軍のウルゲン・シュテンベルグ男爵はボグドハーンを皇帝とする傀儡政権を樹立し恐怖政治を敷いた。これに対してスフバートルやボドローヤダンザンらのモンゴル人民党はボグドハーンの下承を得て1921年、ソビエト赤軍と協力しウルゲン・シュテンベルグ軍を撃破、ダー・フレーを開放した。1924年ボグドハーンは死亡して、政権は立憲君主国から共和制に移行、「モンゴル人民共和国」が成立し、ソ連の指導の下に世界で二番目の社会主義国家として歩み始めた⁽⁴⁾。それまでの生活からの急激な変化は、僧侶や牧民たちの反乱を招く。そのためソ連は軍事・教育・文化等で顧問団を派遣しモンゴルは従属状態に置かれたのである。そして混乱期を過ぎ、モンゴルに社会主義が浸透しつつあったが、ソ連で1986年から開放化政策が開始され「ペレストロイカ」が始まるとモンゴルにおいて1990年、80年間にわたる近代史の中で始めて自由選挙を経験し新しい世紀を迎えた。様々な政党が公認され選挙法が制定され、総選挙が行われている。修正憲法により、大統領制のほか思想・信教の自由などの基本的人権の保障条項が盛り込まれた。1991年ついに人民革命党は一党独裁を放棄、複数政党制による民主政治へと移行した。同時にジンギスハーン崇拜や仏教も復活、経済面でも市場経済が導入されて、西側諸国との関係も強化されたのである。

第二節 モンゴルの文化と文字の正立

こうした歴史で、モンゴル人は、8世紀つまり745年に建国されたウイグル帝国時代に、シリア系ソグド人がアルハベットに基づく固有の文字を作った⁽⁵⁾。この文字は、ウイグル式モンゴル文字であって、13世紀初頭からモンゴル全土の公式文字となってこの20世紀まで至ったことを歴史を述べる。

ジンギスハーンの時代に借用したウイグル文字に比べて、パクパ文字は文字数が多く、すべての子音・母音を書き分けることが出来る。フビライは詔勅を發布して、あらゆる文書はこのパクパ文字で書き、これにそれぞれの地方の国字を添えることを命じた。1239年にオゴディの次男ゴデンはチベット攻撃に向かい、カム地方から攻めて中央チベットに入り、名刹ギェルラカンに炎上させた。名僧の聞こえ高かったサキャ派のクンガ・ギェンツェン（サキャ・パンディタ）が、モンゴルと交渉するためのチベット側代表として甘肅の涼州（りょうしゅう）に赴いたが、これに同行したかれの甥のパクパ（1235-80）は、フビライに招かれてその信用を得るにいたった。この時のモンゴルは非常に複雑な時期を向かえていた。元朝の創始者フビライ・ハーンは、パクパに国師の称号を授け「蒙古新字」を制作させた。これが有名なパクパ文字で、チベット文字を縦書きにし、母音を独立させて子音の下に書く。しかし、1269年にフビライハーンは聖旨を下して、パクパ・ラマ・ロドイジャンチャンに、ウイグル式モンゴル文字に代えて、チベット文字の形を借りたパクパ文字という、新しい文字を作らせた。フビライハーンは、この文字によって、モンゴル、中国、トルコ、チベットなどの民族がそれぞれ自国語で書き表していた文字表記を廃止して、パクパ式モ文字による表記に代えさせようと考えた。こうして、そのパクパ文字を帝国の全領土に普及させるために、新しい文字を教える学校が作ら

れて、ウイグルモンゴル文字はそのまま残った。ツ・シャガダラスレンによれば「古代モンゴル民族であった匈奴は、国家を建設した時に文字を持っていた。そして古代ソクト文字を使った公文書を中央アジア遊牧民すべてに使用させたという。匈奴は、その歴史的必然性によって紀元前1世紀に栄えたが、6世紀にはアバル人が四方に大移動を開始し、その文字をヨーロッパ世界に伝えた。それとともに、中央アジアの遊牧民のうちの突厥が強大になり、音標文字をもつようになった⁽⁶⁾」。すべての国民が文字を知り教育を受けるようになった。遊牧民文化をもつモンゴルでは古くから伝統的に広くゆきわたっていた教育形式は、家庭教育であった。

第三節 モンゴルの家庭教育

モンゴルの家庭教育は、知識教育と生活教育に分けることができる。読み書き教育は、家庭内で文字を親が子どもに読み書きを教える、さもなければ文字を知っている人が兄弟や、従兄弟や、隣家の子どもたちにして、家で読み書きを教えていた。また学芸教育は、民謡、歌、口承文芸、舞踏、造形芸術、など、様々なものが家庭内で教えられた。歌や音楽は、オルティンドー（長い歌）掛け合い歌、滑稽歌、馬頭琴、横笛、口琴、ヨウチン、などがある。西部モンゴルでは、ビエルゲー「モンゴル民族舞踏」タトラガ「西モンゴルで行われる手、足を動かして踊る舞踏⁽⁷⁾」などの踊りが普段から家庭で教えられていた。口承文芸は、主要なものとして、イェルールマグタール、民話的英雄叙事詩、なぞなぞ、叙事詩などがある。造形芸術には、絵画、彫刻、装飾模様、鑄造、刺繍、貼り絵、フォーム[銅、真鍮、厚い皮などの材料を使って作られる手工芸品]など、多くの手工芸が含まれた。

医学教育は、人間や家畜の病気を治療する方法が、幼い頃から子供に教えられる。人間や家畜の病気の治療は、祖先から受け継いできた経

験豊かな年配者によって、家庭教育として教えられた⁽⁸⁾。それを学ぶものは全員習得できるとは限らず、だれでもいいから才能、技術のある者に習得、経験を積ませたであろう。例えば接骨、マッサージから始まって、子どもたちや若者たちが、折りって傷ついたりした家畜の骨や筋肉をどうして治すかを教えられ、自ら何度か経験を積む。そして、別の家畜の怪我の回復の様子を観察して、さらに経験を積む。それから人間の怪我をみる。家庭での知識教育で学ぶ子どもたちは、教える、先生の知識や教育能力、さらに子どもたちの才能や興味や努力の度合によって成果が異なってくる。子ども、大人もその学習到達度はそれぞれ異なっており、家庭ごとに異なり、すべてがうまくいくわけではなかった。家庭の知識教育は、読み書き、学芸、医学を身に付けている者によって行われ、主として、貴族のうちの興味と才能がある者たちが教えていた⁽⁹⁾。家庭の知識は、基本的には専門教育の範疇に属し、大体において当時の読み書きのできる者がそれを行っていた。生活教育は、現在の一般職業教育と専門教育に分けることができると考えている。家庭教育に一般職業教育を行われる。つまり、遊牧民の生活の中に家畜を多くに育つために、搾乳して乳製品を加工する、民族服を作る、裁縫する、刺繍する、縄なう、家畜の糸に紡ぐ、毛を叩く、梳る、食事や茶を作る、服を体に合うように直す、皮や縄やひもをなめしたり、いろいろなものに加工する、乗馬用馬具、鞍につけられる装飾の一種チョドルを結ぶ、鞍や尻帯を作る、オールガ[放牧馬などを捕らえるための丸い縄つきの棒]やホイブ[オールガに結ぶ付けた輪]を用意する、馬車の部品を整える、ゲルを移動させる、遊牧地や水や塩の出るところ、を正しく選ぶ、家畜小屋や囲いを作る、寝床を整える、井戸水を汲み上げる、家畜の雄と雌を交尾させ、寝る場所を選ぶ、駿馬を調教する、ひもを直す、天候や

気象状況を知る、家畜の遊牧や追い込み牧地、冬営地や春営地を正しく選定する、などといった多くの種類の技量や経験を父母が子供に教え込む。家畜業に従事し、遊牧文化に依存した生活は、比較的容易で、主として経験によるにすぎないと思われがちである。だが実際は非常に多くの知識と経験が必要になる。この知識と経験を家庭で習得させ、それは父母や年配者が先生となり、子どもたちが生徒となる。子どもを歩くようになった2歳頃から毎日子羊や子ヤギを、14歳になると子牛を、23歳になったら馬を飼育練習をはじめ家畜の仕事を順番にすることである。また食事では季節の物を食べさせるという厳しいルールを守った。伝統的なしつけでは食事の中で、いろいろなものを教えることが親の義務である。モンゴル民族の伝統的な食糧である家畜(羊、牛、山羊)の骨から肉をかじり取り、また羊肉や牛肉のスープを飲むことは、人間の体にとって大変重要な意味もっている。

これらの食糧は、子どもたちの成長に三つの効果があるとされている。

1. 食糧となる
2. 痛風、リウマチ痛、また疲れがとれる
3. 子供の言語力、思考力が発達する⁽¹⁰⁾

以上の内の三番目の子どもの言語力をどのように発達させるかという点に関しては、モンゴル人の中には昔から生まれた子どもに羊の尻尾を飲ませて育てるという伝統がある。

まず、最初は0.6-1歳の子どもに羊の肉を噛ませ、1-2歳までの子どもには骨髓(こつずい)の肉をかじり取ってもらう。そして、3歳以上の子どもには背骨、首、また肋骨(ろっこつ)の肉をかじり取ってもらっていたのである。これらの行動は子どもたちにとってはご飯を食べたいという気持ちを高め、つまり食欲がわき、更に子供の言語力も高めるための重要なトレーニングになっていたのである。例えば：文字を

正確に読むためのトレーニングとして口をあける、唇をすぼめる、歯をむき出す、また吸い取るといった行動は、骨をかじり取る過程で行われており、さらに首、背骨の肉をかじり取る事で子どもの思考力が発達するのである。例えば：首の肉をかじり取るにはく回してかじり取るには首の肉が美味しい、再会するには母親が良い⁽¹¹⁾ >という格言があり、骨の肉をかじり取る事で子どもは会話が出来、また識別する事が出来、更にものを数えられるといった様々な事が出来るようになってゆく。しかし年上の人のおまへでは、肩甲骨（けんこうこつ）の肉をかじり取ってはいけないという尊敬の気持ちを持たせるように教育する。モンゴル人は、昔から子どもにご飯を食べさせた後、必ずさせる事がある。これに、ご飯を食べ終わった後、容器（器、茶碗、）を舐めるという。（写真1、2、3、4）

1. 子供は器（うつわ）を舐める事で、彼らの喉や口の筋肉の働きが発達し、この様にした事により当時の子ども達はほとんど喉を痛める事はなかった。
2. 器を舐めるという行動で、喉や口の筋肉

の働きが発達した結果、正確な発音することが出来る。例えば：正しい発音すること、また正しく口を開ける事。

器を舐めるためには器を回し、こうした事で子どもの手の筋肉の働きが発達する。器を舐める事で器も奇麗になるという発想は、また思考力の発達にも繋ぐ。これらの行動は、幼い子ども達の健康法の習慣であった。

大草原で育った遊牧民の子どもたちには、代々伝えられてきた様々な伝統的な遊びがあった。例えば、モンゴル相撲・競馬・弓矢などの身体を使い将来の生活手段としての力を育む遊びや、知能を高めるための様々な遊びがある。その知育を育てる遊びの代表が、羊の後ろ足のくるぶしの骨で作った4個を一組とする「シャガイ」である（写真参照）（5、6）。

昔の文献に「シャガイ」で200の種類形で遊べると書かれている。その中の数学、聞き取り調査によると60ぐらい、就学前の子どもたちの遊べる遊びは20種類であることが調べられている⁽¹²⁾。これらの遊びを通して、子どもたちは心身の成長発達や、生活に必要な力、知識や社



写真1 3才から食べる

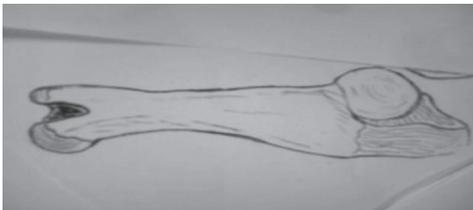


写真2 6月から食べる、骨で遊ぶ



写真3 8月から食べる、遊ぶ



写真4 美味しそうに肉を食べる子供たち



写真5 手作りシャガイ入れ



写真6 シャガイ

会のルールを身につけていったのである。

モンゴルでは金、銀、鉄、木によって物を製作する職人や、皮革飾り縫い加工、刺繍、貼り絵をする手工芸職人などがある⁽¹³⁾。こうした手芸や技術をもっていて、特殊な道具の使用に習熟した人々は、自分たちの専門的技能を、自分の子どもや他の家の才能があり興味がある子どもたちに、手芸や職人の技を伝えてきた。これは、家庭の専門教育であると歴史に伝えている。家庭教育の形態の特徴は：1. 人が分散して遊牧に従事し生活する、という条件の下で、多くの子どもたち1ヵ所に集まって学ぶのが困難である。2. 教育は家畜や手工業を行いつつなされている。3. 父母が自ら先生となり、子どもたちが生徒となって、1つの家に住んでなされる、ということである。一般的に言えば、家庭教育は、遊牧文化をもつモンゴルで最も適した教育形態であった。家庭教育では、現代用語で言うところの、モンゴル文字、算数、化学、物理学、気象、天文学、医学、各種工芸、地理、牧畜、家政学などの学科を自分たちが日常従事する経済や仕事と密接に関連づけて教えていた。こうした読み書きそろばんを教える教育を家庭教育だというのは歴史に残っている。家庭教育の弱点は、理論水準がそれほど高くなく、経験を主にしてきたことである。

第四節 モンゴル国の宗教教育について

1924年に人民共和国が創建され、世界で二番目の社会主義国家になったモンゴルは、仏教は禁じられて70年間、ソビエト連邦の社会主義下に置かれていた。⁽¹⁵⁾ ソ連で1986年から開放化政策が開始され「ペレストロイカ」が始まるとモンゴルにおいて1990年、70年間にわたる近代史の中で初めて自由選挙を経験し新しい世紀を迎えた。様々な政党が公認され選挙法が制定され、総選挙が行われている。修正憲法により、大統領制のほか思想・信教の自由などの基本的人権の保障条項が盛り込まれた。1991年ついに人民革命党は一党独裁を放棄、複数政党制による民主政治へと移行した。同時にジンギスハーン崇拜や仏教も復活、経済面でも市場経済が導入されて、西側諸国との関係も強化されたのである。

モンゴルの長い歴史の中で宗教信仰は、歴史上あらゆる民族の文明の不可欠の構成要素となってきた。「宗教は阿片なり」というマルクスとレーニンの教えを盾にして、共産主義は、宗教教育が全面的に否定される。この期の宗教に関する著作のほとんどが、厳格な共産主義の見地から下された定義に満ちている。1990年に民主化のおかげで信仰の自由が拡大するにつれて、社会と経済のあらゆる分野にその影響力が

及び、とりわけ仏教哲学、歴史研究の方面で貴重な研究が行われた。

さらに1990年頃にキリスト教が入ってきて、現在モンゴルの首都ウランバートル市だけで120の教会が建てられた。それらの福音主義教会は320設立された。またキリスト教、カトリック、ギリシャ正教、モルモン教、ウイットネス地方教会、統一教会、ハイパー教会と多様な宗派と異端がモンゴルに入っている⁽¹⁶⁾。モンゴルの人々は外国の宗教はみな同じものと理解している。ところで、モンゴル人は、なぜ仏教つまりチベット仏教を受容したのであろうか。結局、モンゴル人の「天」を崇拝する宗教意識と符合することがあったから、モンゴル人の「天」を崇拝する宗教意識と漢民族の「天道」を崇拝する宗教意識と仏教の宇宙観の「天」の思想、さらに天に位置するチベットのことを仏の国（仏国）とするモンゴル人の意識等、様々な意識が混合している。

モンゴルの歴史の中で、宗教教育はシャーマンニズム、チベット仏教について下に述べられている。

モンゴル古代家庭教育の一つは宗教教育であったが、それは遊牧民の生活につながるシャーマンニズムである。モンゴルの歴史では、ジンギスハーンを始めとして天の存在を強調し、自らを「天の子、天の使者、天の代理人」と称し、発した命令を天の命と権威付けていたのであった。この見解天とは具体的になにか、という重要な問題についてシャーマンニズムの観念の側面から深く検討されてこなかった。したがって、天という言葉については日本語に訳させはテンゲルの意味は漢語の「天」である。Lean Paul Roux（天（テンゲルはモンゴル語）と何かをという概念については：アジアの先史時代に遡り、数奇な運命辿った。言葉について、時を越え、空間を越え、文化を越え、広大な範囲で用いられている。）すでに2000年以上、以

前からの知られており、中国からロシア南まで、カムチャッカからマルマラ海まで全アジア大陸を貫通して知られて二つの意見が唱えられた。

1. 天「テンゲル」崇拝は、古代中国の天命思想に由来するという。
2. 天「テンゲル」の信仰は北アジア中央アジア騎馬遊牧民族固有のものであり、後に中国、日本、ポリネシアまで広がったという意見で、日本のタカマガハラ「高天原」であり、古代中国の火神・火正で結びつきの可能性は十分考えられる⁽¹⁷⁾。これらの根拠にも多くの問題点が認められている。天は宗教的概念を真剣に吟味した上で導かれた見解ではなく、天（テンゲル）という言葉を遊牧民の人々は生活中で自然環境に根差したシャーマンニズム伴う世界観だと考えている。

今から5000-7000年前の母系社会の時代にモンゴルのシャーマンニズムはモンゴル語では「ブォー」が大草原で遊牧民たちの自然の関係で生活の中で出来たと主張する。オ・ブルブによれば：「母系社会では女性の地位が男性より高かった。シャーマンニズムの機能を果たしているすべての女性を「ウダガン」と呼んでいた。モンゴルのシャーマンニズムを論ずる上で「オンゴッド」という重要な意味は（精霊）であり、動物のオンゴド「精霊」など、土地神や水神などの自然神は人間関係の母系から出たと言う意味がある点からみると、母系社会の残存である⁽¹⁸⁾という説を引用している。しかし父系社会では男性シャーマンニズムを「ザイラン」と呼んできた。性別が限定されることはない。

モンゴル人は昔から長時期には、大自然環境を守るために毎年オボー祀りは共同体の統合と宗教信仰の表象である以外、マイノリティーであるモンゴル族の民族アイデンティティの強調、人間性の回復と民族文化、宗教信仰の復活、再生といった展開を見せている。田中圭治郎によれば『ある国民的性格が優勢な国家において、

比較的孤立化したグループまたは個人、小規模な移民。』⁽¹⁹⁾のタイプは、国家の支配的な価値観とは異なる価値観を持った人々である。これは現在モンゴルでは、文化的、宗教的な言語的尊重され、マイノリティのためにオボー祀りと考えている。モンゴルの伝統文化の中でオボー祀りは(シャーマン教の祀り)大草原の環境を保護運動や自然教育である祀りと歴史に伝わらされている。オボー祀りは長い間モンゴル民族はそれぞれの地域において神聖視された山または小高い丘や湖のほとりに石・樹木等を無数の石を円形に並べ、それを三角の形のように積み上げたもので造営物を作ってオボーというのである。昔からモンゴル人は、山や川にはそれぞれ神が住んでいて、その中でも一番偉い神は天に住んでいると考えた。人々は天の神様に、動物を捧げたりしていった。そのとき天の神様に分かりやすいように、石を積んで山のように石塚に当たるものである。オボーとはモンゴルの小高い山の上や峠によく見られる土地の守護神の宿る石の堆積である。オボーを祀るには、まず柳の枝を立てそれに「ハダグ」という絹の布やヒー・モリ(馬の頭と黒馬と白馬の尻尾で作ってジングスハーン時代の国章とされたを飾り付けた後、四方で香をたく。(写真)



オボー祀りは一年に一回と決まっていて、厳しいルールを守ることを子どもたちに教える。まず最初は挨拶から教える。モンゴル人は普段、会うたびにサインバイノー? (こんにちは)と

だけ挨拶するわけではない。挨拶のときには、四季か、もしくは仕事(牧畜)は今どんなことをしているかに関係する言葉を付け加える。

例えば: 季節の挨拶

春: 穏やかにゆっくり春を過ごしていらっしゃいますか?

家畜の子は元気ですか? 群れは増えていきますか?

夏: 夏をよく過ごしていらっしゃいますか?

家畜はよく太ってきていますか?

秋: 豊かに秋を過ごしていらっしゃいますか?

家畜はよく肥えましたか?

冬: 冬を豊かに過ごしていらっしゃいますか?

飼料が足りて豊かに過ごしていますか?

この様な上記に挙げた類の言葉を子どもたちにも覚えさせて、挨拶の習慣をつけさせる⁽²⁰⁾。そして群衆内での公衆道徳も覚えさせる。子どもたちは、オボー祀りに大自然の環境や山や川についての詩を作る、詩で語る歌を作る。また、昔に作られた馬斗琴を弾いて歌う長歌(オルティン・ドー)の多くは、今では作者不詳の民族歌として子どもたちに歌い継がれている。家庭内における伝統的な教育はインフォーマルな教育に限られており、特に母親が子どもと直接係ることが多かったが、主要な核をなす。宗教的に父親を「火」、母親を「水」ということからジ・ジェグチドによれば「母親は子どものレベルにあわせて子どもに接するため幼児語を使うこともよくある。父親は家畜の移動や、隊商を組む等、地域や家族のための仕事で留守がちになることが多く、生活の中で占める地位の割に、しつけではさほど明確な役割を果たさなかった。父親の客人は、子どもをからかったり、おとぎ話を聞かせたり、子どもの遊びについて話したりすることで子どもをより大人に近いものとして接する」⁽²¹⁾という、父親、母親の間にはしつけにおいて明確な役割の違いがあるだけでなく、その方法も異なっていた。エルデネイチル

よれば、「両親を尊敬することは民間教育、子どもを「火と水二つの子」という。子どもが父親に甘やかされれば火に焼けるような、母親に甘やかされれば水に溺れるような感じになる。父親から心身ともに離れると寒さの中で火から離れたように凍え、母親から離れると養分・水分の足りない植物のように枯れる⁽²²⁾」という。また、父親は主に禁じる、叱る等の短期的な性質をもつ方法を利用し、母親はその逆で穏やかにやわらかく向き合うというように、対照的に描かれる。また、父親の主な役割は「方便」になることであり、母親のそれは般若になるという。この二つのことばは「互いに相反しながらも表裏一体になっているものを表す概念」である。方便と般若は陰陽とも考えられ、相反しながら一体という父親、母親のとらえ方は、ことわざでは「父の教えは金、母の教えは学問の頂上」⁽²³⁾という。モンゴル遊牧民の生活は、(天)から降る雨、(地)に生える草という自然の恵みによって成立している。ある時は雨がよく降り、草がよく生え、家畜が増える。またあるときは、寒波など災いで家畜が全滅し、人々の命まで奪われる。遊牧民にとって、大自然とは近くて遠い存在であると共に、優しくて恐ろしい相手でもある。そのため、モンゴル遊牧民は、一方で自然を敬い、他方で自然と闘っている。その闘い方は、自然を自分の力で組み伏せ、変えてしまうとする闘いではなく、自然の猛威をどのように避け、自然とどのように調和するかという闘い方である。このような自然との関わりがモンゴル人の宗教と生活に様々な影響を与えている。

モンゴル国に仏教は13世紀にモンゴルにチベット仏教のサキャ派という宗派が伝来されたが、この時期の仏教は宮殿の中、つまり貴族の間のみ信仰されていた故、一般人には信仰されることなく、長年経たず滅亡してしまったのである。ところが、16世紀末になると、チベット

仏教のゲルク派という新宗派が伝えられることになる。ここで、チベット仏教の各宗派とモンゴル民族の関係について整理しよう。

モンゴルでは「インドからチベットに仏教が伝わったのは8世紀で、漢文史料にいう吐蕃王国の時代である。吐蕃時代には、インド系の戒律の厳しい仏教のみが正統とされたが、9世紀に吐蕃王国が分裂した」⁽²⁴⁾。その後、在家信者の間にヨーガを実践するタントラ仏教が広まった。仏教教団の中にまで入り込んだタントラ仏教の思想をここでごく簡単に解説すると、性行為の恍惚(こうこつ)が主観と客観の対立を超える仏の無二智を体験させる。充足されると無欲になり、本来存在しない外側の現象世界に由来する執着を克服することができる。

それによって「仏性」が活性化される、という思想である。その後10世紀に入ると、仏教界の中から戒律復興の運動が起こり、チベット各地で新しい教団が結成された。教団には多くの人々が集まったので、商業の発達をうながして、地域の経済的中心になっていた。仏教教団の施主となった地方の豪族は、積極的に教団の経営にたずさわって、優秀な学僧を集めて設備も整えた。彼らは、家系を保つための後継ぎ以外の男の子を教団に送り込み、教団が生む権利を独占するようになった。

10世紀に再興したチベット仏教の主流は、戒律の伝統を保ち、顕教の学習を主として、タントラ仏教の実践に制限を設けるものだった。これに対して、吐蕃王国で禁教だった中国仏教とタントラ仏教の流れを受け、呪殺のような邪法を実践する宗派をニンマ派(古派)と称した。

正統仏教の中から、11世紀にカダム派が生まれた。同じ頃、タントラ仏教の実践に熱心なマルバによってカギュ派が創設されたが、この派も教義的にはカダム派の一支派だった。カギュ派の中から、12世紀にラサの西北のツルプの僧院を中心としたカルマ派が生まれた。11世紀に

は、ツァン（中央チベット）のサキヤにその地の豪族が建てた寺を中心として、サギヤ派も誕生した。

さて、チベットとモンゴルの関係は、モンゴル帝国第二代のオゴディ・ハーンの時代にさかのぼる。この時のモンゴルは非常に複雑な時期を向かいしていた。

同時に、元朝の宮廷におおいに広まったチベット仏敎も途絶したのである。これは、フビライ家の元朝と新しいモンゴル民族の間に、オイラト帝国の支配という断絶の時代があったからだろう。そして16世紀後半モンゴルとチベットとの関係が復活したとき、チベット側には元朝時代の記憶が強く残っていた。その中で、モンゴルとの関係をもってたくみに利用したのは、ゲルク（黄帽）派だった。ゲルク派は、アムド（青海省）地方のツォンカに生まれたツォンカパが、15世紀初めに起こした宗派である。ツォンカパは、サギヤ派をはじめとする各派を遍歴した後、ラサにガンデン大僧院を建立した。ツォンカパとその弟子たちは、顕敎の学習に力を注ぎ、その過程を終えて選ばれたもののみ密敎の実習を許した。この敎団は規律がよく守られたために世間の評判が高く、非常に勢いで宗徒の敎をふやした。ゲルク派はカダム派を合併統合する傾向にあったので、新カダム派と呼ばれてもいた。中央チベット北部に拠点をおいていたカルマ派は、敎義的にはカダム派に属したカギユ派の支派だったので、ゲルク派がカダム派を吸収するのを、自派に対する勢力の侵害と考えた。カルマ派には、黒帽派と紅帽派と呼ばれる二派があったが、中でも紅帽派は、14世紀中ごろに転生ラマ制度を生み出し、施主の地方王権と結んで、武力を使ってゲルク派に圧力を加えた。

危機意識を持ったゲルク派の施主たちは、かれらの敵対者カルマ派にならって転生活仏を選び出し、宗派の統合をはかることにした。歴史

学者サ・バーサンよれば「ゲルク派の長であるガンデン大僧院の座主は、高德の学僧が7年ごとに交代する地位であるから、統合の象徴にはならなかったのである。そして1543年、ゲルク派最初の転生活仏ソナム・ギャツォが、高僧ゲンドゥン・ギャツォの化身として誕生した。ゲルク派は、アルタン・ハーンとダライ・ラマ三世の関係を、フビライとバクバの関係の再現とみなした。これは、施主と帰依所の関係であるが、チベット仏敎の敎えでは、聖俗の二統は補い合う対等の関係である。モンゴル語ではこれを、「宗教と政治の二つの理」⁽²⁵⁾という。ダライ・ラマ三世以後、敎権を代表するダライ・ラマが、施主であるモンゴルのハーンとその一族に称号を授与する慣例がうまれたのだった。このアルタン・ハーンという人物は、モンゴル高原の実権を握ったトメト部族長で、35年の間に、その後のモンゴル民族の生活や文化の方向を決定づける大革命をいくつももたらした。その第一は、オイラトを圧倒し、現在モンゴル民族が住む地域のほとんど、すなわちモンゴル国の領土の大部分から青海地方までを回復したことである。第二は、たびかさなる明への侵入ごとに多数の漢人を捕えて連れて帰り、その他、明の逃亡兵、生活難の農民、白蓮敎徒などがモンゴルの遊牧地に入植して、アルタンの庇護を受けたことで、モンゴルの地でも、この後穀物が生産されるようになった。今の中国内モンゴル自治区の政府所在地フフホトは、これら亡命中国人たちが、アルタン・ハーンのために1565年に築いた中国式の城「大板升」を起源とする。第三は、元朝崩壊後、途絶えていたチベット仏敎が、アルタン・ハーンの帰依によって、モンゴル民族に受容されたことであると歴史に伝えた。

17世紀にゲルクがチベット仏敎の代表になるまで、各宗派が長い間抗争を繰り返したのは、敎義の違いからではなく、それぞれの施主である地方王権の対立を反映したものだだった。

18-19世紀に入ると僧侶達の数は急激に増加し、1785年の時「イフ・シャビーン・フレ」訳せば、「大学僧学園」の学僧の数は、おおよそ一万五千人までにも上り、ハルハ・モンゴル全体の僧侶の数は約七万人に達していたという。1868年にイフ・フレ寺院のみに、一万人の僧侶が在籍していた。

このようにして、僧侶の数が急激に増加した理由は、いくつかある。例えば、当時の僧侶は経済的に余裕があり、軍事の義務から外せれ、この他税金からも免除されていたのである。僧侶は俗人よりは、社会的地位が高く、またその僧侶の中でも上・中・下という三つの階級があった。上級僧侶とは、活仏いわゆる転生ラマを指す。ラマというのは僧侶を指す。転生ラマとして、モンゴルでは一番有名なひとは、ジェブツン・ダムバという人物である。この人物は、チベット仏教のチョナン派という宗派の高僧であるターラナータ・クンガ・ニンポの化身だとされている。このターラナータ・クンガ・ニンポは、チベット人として、はじめてインド仏教史を著作した大学僧である。彼の転生者であるジェブツン・ダムバ一世は、ハルハ・モンゴル勢力のあるトシエト部の長であるゴンボ・ドルジの次男として1635年に誕生した。彼は、幼い時に仏門に入り、チベットに留学して学問に謹んできた。そして、帰国しハルハ・モンゴルの各地域に寺院を建立し、大変宗教活動を行ってきた。また、この人物は優れた仏教美術家でもあった。彼が作った数多くの仏教美術作品は、現在も世界的評価が高く、モンゴル人に愛されている。彼は、当時のハルハ・モンゴルの政教両界の指導者でもあった。

17世紀後半にイフ・フレが設立された以来、モンゴルの仏教教育は正統に研究されてゆき、ここはモンゴル仏教の中心地となった。ここで多くの僧侶は、仏教哲学、チベット・サンスクリット語学、仏教文学、論理学、医学、暦

学、仏教芸術といった様々な教育を受けていた。1739年に設立された、宗教学校から多数の学者が誕生し、モンゴルだけに留まらず、海外でも名を上げていた。僧侶は、経典を唱えるために、まずチベット語を学ばなければならない。チベット語をマスターしたら、次は経典を丸暗記させられる。その後は、内容を教えられ、つまり翻訳をしていく。こうした段階を踏んだ上、学校を卒業し、それぞれの学堂に入り、それから、お寺の務めをしながら、若い僧侶に仏教を教え、宗教活動をしていく。16世紀から18世紀にかけて仏教の繁栄と共に800以上の僧院や寺院がモンゴルに建設されたが1930年代に想像を絶するような政治的弾圧をうけた。共産主義の追放政策により、750以上の僧院や寺院が破壊され、ほぼ30000人のラマ僧が殺され、多くの影響力をもった高位のラマ僧や芸術家や哲学者、亡命中の若い僧たちが虐殺されたうえ膨大な量のモンゴルの歴史的、文化的な貴重品や作品が破壊された⁽²⁶⁾。

20世紀の初め、モンゴルにチベット仏教が急速に発展し、また多くの若者が仏門に入り、仏陀の教えを学びたいという高い決意を抱いていた。僧侶になることで字を読み書きが出来、当時は社会的地位が高い人と見なされていた。当時の学僧たちは、先生の家に通い、また先生の家事の手伝いしながら、学問に励んでいた。

モンゴル人の僧侶たちは、経典、多くの文献や作品を、チベット語からモンゴル語に翻訳し、またチベット語で数多くの作品を著作していた。更に、学問の頂点を目指し、チベットに留学して一流の僧侶になったら帰国し、母国で宗教活動を行っていた。

1944年の血の粛清以降、最も重要な寺院の一つのガンダン寺院再開を許可されたがそれも社会主義政府の厳しい統制下に置かれた。

しかし1970年にモンゴル仏教大学が僧侶の教育のために開校を許可され、モンゴルとソビエ

トブリアートの高校課程を卒業した男子の中から仏教研修生が選抜された。

1990年以降仏教は復興の道をたどり、新しい僧院の建設とともに、多くの壊された僧院の復元も為された。ガンダン寺院の仏教芸術学校ではインドや、チベットやネパールから指導的な高僧が多く訪れ、ダライラマも来蒙した。

第五節 モンゴル民族復興運動時代の教育

ボグド=ハーン政権成立以前のモンゴルの教育をリンチェンは習得言語という視点から、3種類に分類している⁽²⁷⁾。その1に、仏教寺院における教育であり、全国各地の寺院で行われた。人数ではこれが最も多く、チベット語による経典の習得を主にしてきた。2に、清朝の官吏養成を目的とした、一種の公立学校である。ここでは、多くはマンジュ語を身につけ、一部には漢語を習得するであった。彼らはマンジュ語、漢語で、四書五経などの古典に親しんでいた。このような学校は、「イヘ・フレー（現在のウランバートル）、ウリアスタイ、ホブドにあったものが有名で、その他各地でもこの種の教育は行われていた。ただしこれらは清朝による統治の必要上生まれたものであり、モンゴル独自の政府による、系統的教育とは異なる性質をもつものである。ボグド=ハーン政権の成立後、イヘ・フレーにあったマンジュ・(モンゴル)漢語の学校はそのまま残ったが、ウリアスタイのそれは清朝の大臣の追放時に解散したという。3にはモンゴル語のみによる教育であり、主に個人の家で手習いのような形で学んでいた。寺院での教育を受けた人数には及ばないが、2に挙げた官吏養成教育を受けたものよりは数が多かったという。文字を習った後、年代記などの書物を読み覚えた。このような形で学んだ者の中から、公的機関の文書係として採用されることもあった。

ボグド=ハーン政権の成立時、イヘ・フレー



チベット人ジャイブツタンバは42歳で大8世を皇帝としてボグトハーン政権が樹立され、その時代公立学校教育設立した

に残った清朝の官吏養成学校は、外務省付属学校に引き継がれたほか、イヘ・フレー駐在のロシア総領事館に付属のロシア語学校もそのまま継続された。この時期、「公立学校」の基盤となったのは、1. 清朝時代からの流れをくむ、官吏養成を主眼とした学校、2. 通訳養成を主眼とする外務省付属の学校の2つであり、これらを発展させる形で全国および首都イヘ・フレーに公立学校が整備されていくことになる。教育は、ボグド=ハーン政権にとって当初から重要な課題としてとらえられていた。ヒシグトによれば「教育事業の創設と実施は時代の要請、社会が必要とするものであった。[中略] 有識者や進歩的思想を持つ者たちから、公教育の伝統復活について、国主ボグド=ハーンと権力者に向けて意見や奏上が提出されるようになった」と述べている。

内務省のとりくみ

上記の構想を受けて、国の機関での教育・人材育成を具体化する動きの1つは内務省のそれである。内務省の側がボグド=ハーンに提出した1912年2月7日付の奏上文から見るができる。ここでは、独立国を樹立したモンゴルが、「宗教と政治にますます益とすることがら」の

基礎は、国家の柱となる人材であること、その源は「文字の教育を重んじることにほかならない」⁽²⁸⁾と述べ、とりわけ、世襲の貴族から有識者を輩出することを重視、貴族および貴族の子弟に対して優先的に教育を行なうとし、各地の王公およびその子弟は国家の威信を受けて平民を治める責任ある地位にあるので、のちのちの役職をまっとうするために幼いうちに学問を修める必要がある、と述べた上で案を提示している。具体的には、1. 対象は年少のタイジとその子弟。10歳から20歳の者を選抜して教育する、2. 費用はそれぞれの私費でまかなう、3. 教育場所は首都イヘ・フレーの内務省、4. 教育内容は「モンゴル・ロシア・マンジュ・漢などのさまざまな文字」で、これらの教育をおこなった後、20歳になったら自宅に帰す、というものであった。

ここからわかるのは、政権主導による教育という構想はあるものの、その内容はきわめて退定的であったということである。全国規模での学校整備網、国民皆教育という構想は提示されておらず、対象は各地の統治を担当する見込みの世襲貴族の子弟に限られており、費用は、公費ではなくそれぞれの私費に頼り、教育内容は「文字」（言語の習得も含まれる）に限定されている。これらの点で、内務省の動きはこの段階ではまだ「近代学校」としての構想がなかった。この案が認められたため、内務省は共戴2年正月9日（1912年2月27日）付の文書でその旨を政権の対象となる該当者を内務省に來させること、「春の末の月」のうちに該当者名簿を作成のうえ報告することを命じるとともに、他の4省にもこの旨を通知している⁽²⁹⁾。学校計画同様に、外務省も独自の教育活動に取り組んでいた。共戴2年春の末の月19日（1912年5月5日）、外務省は、年少者にロシア語を学ばせるための教育機関を省内に役立することを提案し、ボグド＝ハーンの許可を得た⁽³⁰⁾の提案では、「あ

らゆる国家では学校を開設し年少の子供を教育し、選抜して登用することを重要な施策として「いる」ことを述べ、各国の言語を学ばせる重要性を指摘した上で「わが国はロシア・中国と国境を接しているが、ロシア語・漢語を解する人間は非常にわずかであり、さらにロシア国の言語を解するものはまったくまれである、かつて清朝がわが首都フレー駐在大臣の役所に役立したモンゴル学校から生徒6人を選び」、毎日役所の学校でロシア語を学ばせることになり、独立国家樹立以来も引き続き取り組んできたが2年たっても見るべき成果があがっていないと現状を分析している。そして、これまで彼らの教育の経費を国が負担してきたが、このような有名無実の状況は、その資金を無駄にすることになるとして、改善策を提示している。

外務省の提示した計画は、1. 省内で建物のいくつかの部屋を清掃して整え、学校とする、2. 専門の教師を新たに任命する、3. 生徒数は現在いる生徒6人にさらに4人を追加して10人とする、4. 生徒4人につき毎月10両、紙・筆などの必要物品、学校での燃料費、職員などの経費を従来どおり財務省から提供する、というものであった。

教師については、イヘ・フレー駐在野ロシア総領事館に要請した結果、「ロシアの著名な学者であるブリヤート人ジャムサラノフが目下当地に在住しているため、派遣しても良いとの回答を得た」とある。そこで、彼にロシア語の教育を担当させ、外務省の官吏であるトイン＝ロブサンジャムバにモンゴル文字の教育を担当させる、とした。この案は許可され、通訳官養成を主眼とする、外務省による教育が本格的に実行に移されることになった。教育内容は、ロシア語、モンゴル語のほか、暦法などの科目があった。また1913年5月には、ロシア領事館付属の学校でロシア語を学ぶ生徒と合わせて16人が引率教師2人、医師1人、と共にロシア領のイル

ターク、キャフタ両市の学校派遣されていることから、外務省が教育に力を入れていたことがうかがえた。1912年4月27日に外務省付属学校の教師として活動を始めた⁽³¹⁾。学校の特徴は教育のプロセスを3段階であり、初等教育から中等教育、高等教育へと踏むことである。教育の内容は：最低限の科目として、言語、算術、幾何、博物、世界のすがた、人類、発展史、自国の地理、自国の歴史、国外の大国歴史、他者を教育する方法、保健衛生など。教材は：教科書それぞれの母語をもちいていること。また重要かつ必要な外国語も学んでいることになった。イヘ・フレーに初等学校1校、4アイマク(県)に各地でそれぞれの初等学校を設立した。1915年に「欽定モンゴル国法典」には：イヘ・フレーおよび全国の各地に初等、中等、高等学校に設立することで、1. 対象はハーン、ワン(王)グン(公)の子弟以下、10歳以上15歳以下のすべての聡明な少年、2. 学校の運営は別に定めた規程に従う3. 小学校の定員は特に定めないが、首都の小・中学校の定員は80名とする4. 小学校ではモンゴル文字、算術、モンゴルおよびその他の諸国の事情、生活向上法、様々の教え文献の読み方を習得させる。5. 小学校の課程を修めた者を中学校に進学させる。6. 中学校ではマンジュ・モンゴル語の辞書、四書五経、露、漠、英、仏等の言語、翻訳、諸国の生活習慣識者の規範と思想、暦法、博物、世界地理、加工、測定、数学、体育、などを学ばせる。また中学校を優秀な成績で卒業したものは高等学校へ進学させるなど。法典に定められたことで、学校制度は法的な裏づけをもつことになった⁽³²⁾。1933年5月には小中学校規則が新たに制定された。この規則には、いかなる学校においても宗教教義を説くことや宗教に則った教育活動を行うことを禁止するという項目が組み込まれた。ボグドハーン制モンゴル国は活仏を君主とする国家であり、当時は寺院等が教

育の場となるなど、宗教と教育、また宗教と政治、生活は密接な関係を保っていた。モンゴル人民共和国成立後も1928年にダムバドルジ政権が倒れるまでは、ジャムツヤラーノのように宗教は独立国家にとって欠かすことのできない特質の一つであると自覚している人々があり、彼らは仏教信仰とマルクス主義との衝突を最小限に留める努力をしてきた。また、仏教が公立の学校で教えられる試みもなされた。しかし、コミンテルンやソ連の影響力の強まりとダムバドルジ政権を崩壊はモンゴルを社会主義国家建設へと向かわせる追い風となり、教育政策では宗教教育の禁止措置がとられるようになった。

終章

本稿ではモンゴルの家庭教育、宗教教育さらにそれらを踏まえた。モンゴル民族にとってそのような教育が求められるかについて論述してきた。それは伝統的な価値観とソビエトの影響を受けた社会主義に代表される外国からの価値観との対立を意味していた。モンゴルは元代表される独立(建国)を前提とする民族文化を求める時期、清朝に代表される外敵の支配を受けた自文化喪失の時期。さらに「バレストロイカ」に代表とれる自己の民族文化の自尊心を確立した時期に分けられる。家庭教育の中では遊牧民としての文学、芸術が希求され、自然の中で、日常生活の中で子どもたちに経験を積ませることにより、子どもたちの才能を伸ばすことが行われてきた。それは、家畜との共存であり、子どもたちに生きる知恵を教えている。また、民族文化は原始より、シャーマンニズムに代表されるような自然神崇拜を維持しており、後にはラマ教に代表される仏教の導入により、民族的文化的特質を深めてきた。彼らは、高度な思想(思索体系)を持つことにより、高文化を維持することが出来た。しかしながらソビエ

ト社会主義の支配下におかれると貴重な文献が宗教的であるという理由のため排斥され、文化的に不毛な時代へと突入していく。それは、モンゴル民族の誇りを失うだけでなし、宗教という人間観の形成に必要なものを否定することにより、薄っぺらな人間しか養成出来なくなる。

「ペレストロイカ」以降、モンゴルでは宗教教育が認められる。それに民族復興運動と軌を一とするものである。モンゴルに土着化したラマ教は、モンゴル民族の文化そのものであり、その再建はモンゴル人に自己のアイデンティティを確認させるということの意味している。今後、モンゴルにおける民族復興運動はモンゴル文字の普及、ラマ教寺院の建設といったソビエトの支配下の社会主義政府下のソビエト化を否定する動きとなっていく。それは民族の自尊心を高め、かつ社会主義の倫理観からの解放、モンゴル民族の独自性を追求することに通がる。現在はこれらの動きの過渡期であるが、それと可能にするのは未来の成年を養成する教育の活性化であることはいうまでもない。

【注】

- (1) シ・シャガダル『モンゴルの教育歴史』ベンピサン出版2000年頁323
- (2) 萩原守『清代モンゴルの裁判と裁判文章』出版2006年頁88
- (3) シルバサンドリジ『帝国モンゴルの歴史』ウラーンバトル出版1996年頁256-260
- (4) チ・ダライ『モンゴルの歴史』ウラーンバトル出版1973年頁123-125
- (5) シ・シャガダラスレン『モンゴルのイル・トブチョー』出版1992年頁14
- (6) 同上頁6-8
- (7) ズェ・ダムディンスレン『モンゴル文芸概説』ウラーンバトル出版1957年頁57
- (8) 国立歴史中央アルヒーフ、第6部第21章
- (9) 同上第6部23章
- (10) ベ・ノロボー『モンゴルの伝統的な食事』ウラーンバトル出版1995年頁6-9
- (11) ラ・デンデブ『モンゴルの伝統教育と諺』ウラーンバトル出版1965年頁7
- (12) ガ・ミヤガマル『モンゴルの伝統的な遊び』ウラーンバトル出版2009年頁12-15
- (13) ダ・スベバトル『シャガイ遊び』ウラーンバトル出版1962年頁4
- (14) デ・アリマ『モンゴルの文化』ウラーンバトル出版1980年頁23-24
- (15) ド・ドルジ『モンゴルの歴史家』ウラーンバトル出版2000年
- (16) モンゴル国、『2005年-2010年』数値統計資料ウラーンバトル出版2010年頁420
- (17) エム・エリアーデ島田裕巳・訳『世界宗教史3』筑魔書房2000年頁27
- (18) オ・プレブ『モンゴルにおけるシャーマンニズム』2009年頁25-31
- (19) 和田修二、田中圭治郎『何か親と教師を支える』ナカニシヤ出版、1999年
- (20) ダ・バーサンホロル『モンゴルの宗教としつけ』ウラーンバトル出版2006年頁6-8
- (21) ジ・ジェグチド『モンゴル宗教と伝統的教育』ウラーンバトル出版2007年頁3-21
- (22) ゲ・エレデネーオチル『モンゴルにおける伝統教育』ウラーンバトル出版2008年
- (23) ラ・ナムジル『諺と伝統的教育』ウラーンバトル出版1978年頁9-11
- (24) バ・ツシグバヤル『モンゴル仏教の歴史』アデモン出版2009年8-9
- (25) 同上 頁123-212
- (26) ダ・ナツガドルジ『モンゴルの歴史における仏教』ウラーンバトル出版1963年頁60-62
- (27) ベ・シレンデブ『ボグドハーン時代のモンゴルの文化』ウラーンバトル出版1966年頁29-31
- (28) 同上41-45
- (29) ベ・レンチン『ボグドハーンの設定学校』ウラーンバトル出版1964年頁9-10
- (30) 同上15-19
- (31) 同上28-30